

ミュージアム・コンサート

## 東博でバッハ vol.50 大萩康司(ギター)

### 曲目解説

#### J.S.バッハの作品

##### 前奏曲、フーガとアレグロ

1740～45年頃に書かれたとされており、当代随一のリュート奏者であったシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスとの親交が作品に結実したと言われている。プレリュード(前奏曲)、フーガ、アレグロの3楽章からなり、簡素化されたソナタのような楽章構成となっている。リュートまたはチェンバロのために書かれた曲で、低弦の動きにも撥弦楽器の妙を生かした響きを聴くことができる。

##### リュート組曲 第4番

原曲は、ケーテン宮廷楽長時代前半、1720年以前に作曲されたとされる《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番》。おそらく1735～40年頃、バッハ自身によって、リュート用に編曲された。全6楽章からなり、明るめの印象を持つ舞曲が並ぶ。特に第3楽章ガヴォット・アン・ロンドーは有名曲で、単独で奏される機会も多い。

##### リュート組曲 第3番

バッハのリュート組曲は4曲あるが、そのうち2曲は自作の無伴奏作品からバッハ自身が編曲したもの。本作品 BWV995(ギターへの編曲はイ短調が多い)は、《無伴奏チェロ組曲 第5番》を原曲としており、編曲された時期は1730年前後とされる。フランス風序曲のプレリュードに始まり、全体的に典雅な響きを基調としているが、どこか内省的でほの暗い情熱を秘めているようにも感じられる。最後は印象的な付点リズムのジークで締めくくられる。

##### 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番 より シャコンヌ

「シャコンヌ」は《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番》の終楽章(第5楽章)に置かれた大曲で、バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名曲とされ、単独で取り上げられる機会も多い。冒頭で呈示される8小節の主題が、4小節ずつ前後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、その8小節の主題がさらに30回にわたって変奏されていく。「シャコンヌ」は多くのギタリストによって愛奏されており、撥弦楽器独特の響きが、ヴァイオリン演奏とはまた違った緊張感と昂揚感をもたらしてくれるだろう。